

川榕菴ノ著ノ『菩多尼訶經』^{上ニ}見ユ。デアアル該書ハ文政五年（西曆千八百二十三年）正月ノ出版デアアルユエ前記伊藤氏ノ『名疏』ヨリハ七年モ前ニ世ヲ公ニナツテ居ル其レ故東洋ノ我日本帝國ヘ始テ泰西ノ植物學(Botany)ヲ通説シテ之レヲ宣傳シタノハ全ク宇田川榕菴デアアル、ソシテ前述ノ『泰西本草名疏』ノ書ハ決シテ一般植物學ヲ傳ヘシモノデナク唯トウンベルグ(春氏)ノ日本植物志ノ植物名ノミヲ抽キ來ツテ臚列シタノミデ之レニ多少著者ナドノ私見若クハ批判ヲ加ヘシモノガアルニ過ギナイ又其書ノ附録一冊ハ是レ唯リンネ氏ノ植物分類法ヲ記セシノミデアアル即チ植物學^{ボタニ}ヘ對シテノ其書ノ資格ハトモ榕菴氏ノ書ニハ及バヌノデアアル、前ニハ『植學啓原』ノ序文中ニ纂作處ガ「亞細亞東邊ノ諸國止本艸ノミアツテ植學無キナリ斯學アツテ其書アルハ實ニ我ガ東方榕菴氏ヲ以テ濫觴トナスト云フ……我ガ東方ヲシテ始テ斯學アルヲ知ラシム其功業亦大ナラズヤ」^{漢文ト}述ベ、後ニハ富士川游博士ガ其著『日本醫學史』中「日本醫事年表」天保四年ノ欄ニ「宇田川榕菴、植學啓源^{ニシク原タルベシ}」ヲ著ス、是ヨリ先キ榕菴ノ門人伊藤圭介、泰西本草名疏ヲ著シテ、李氏二十四綱ヲ説ク、而シテ未ダ植學全體ニ及バズ、此書^{牧野曰ク即チ植學啓原}ヲ以テ植學ヲ説ク書ノ初トス」ト書カレタノハ假令『植學啓原』ノ前更ニ『菩多尼訶經』ガアルニモセヨ兎ニ角能ク其邊ノ消息ヲ明ニシ得タモノデアアル ●『植學啓原』ハ科學ノ書デハアリ又文章モ漢文デハアルガ然モ事柄ヲ平易ニ叙シ去リ叙シ來ツテ其行文ニ些ノ難澀ノ迹ガナイ故ニ知ラズ識ラズノ間ニ忽チ其全卷ヲ讀了スルノデアアル即チ其流麗ナ文章カラ言ツテモ其歷史的價值カラ言ツテモ吾人ハ當サニ其一本ヲ書架ノ間ニ備フベキデアアルト思フ況テヤ方今我植物學界ニ通用シツ、アル植物學術語ノ此書カラ出テ居ルノガ尠クナイ所ヲ以テ見レバ益本書ノ忽諸ニ附スベカラザル事ガ首肯カル、^{植學トハ今言フ植物學ノコト}

○斷枝片葉 (其十一)

斷枝片葉 (其十一)

牧野富太郎

●芭蕉ヲばせをトスル假名ハ誤

芭蕉ノ假名ハばせうデナケレバナライコトハばせうハ芭蕉ノ字音カラ來
 タモノデアアルカラデアアル然ルニ從來之ヲ殊更ニばせをト書イテアルノハ如何、是レハ何故カ昔カラ誤リ來ッタ
 コトガアル上ニ更ニ又或ル昔ノ歌ノ其句ノ上カラノ掛リニヨツテ其誤ノ遂行ヲ手傳ハセタ事モアル即チ齋藤彦
 麿ノ隨筆ノ『傍廂』書卷ノ一ニ「古今集はをさく誤なきを物の名には芭蕉はばせうなるを心ばせを」とよみ
 後撰集には紅梅はこうばいなるを鶯の子をばいかにとよみ蜻蛉日記に岡はをかなるをつゝじのおかしからま
 しとよみその外にも又戀を古居といひ四位を椎にいひかけのちくは逢初を藍染にいひかけなどいともだりが
 はしくなりになり「トアルヲ見レバ其邊ノ仔細ガ能ク了解セラルル、古ク『和名本草』デハ根ノ方ハ波世宇ト正シ
 ク書イテアルガ實ノ方ハ波世乎波トアル是レハ正シクナイト思フ『下學集』ニハ「バシヨウ」トシテアレドモ
 是レハ「バセウ」デアラネバナラス又『本草和名』ニモ「波世乎波」、『倭名鈔』ニモ「ハセヲハ、發勢乎波」ト
 シテアレドモ是レモ同ジク正シクナイ、然シ徂徠ノ『南留別志』ニハ「芭蕉をはせをとかし紀長谷雄を發昭と
 かくを見れば蕭宵の韻の字を古はうのかなは用ゐぬ事と見へたり」トアル或ハコンナコトデうノ處ヲ特ニをト
 シタモノデモアラウカ ○日本ノばせうハ元來我土產デナク蓋シ原ハ支那カラ渡シタモノデアラウト思フ從來
 芭蕉ガ充テラレテアルガ然シ支那デ芭蕉ト云フノハ必ズシモ一種ニ限ラレタ名デナク博ク其ノ類ヲ指シタ總名
 デアル故ニばなノ一種ナル甘蔗ナドモ其ノ一種ニ屬スル、芭蕉ノ字ノ譯ハ蕉ハ始終葉ガアツテ一枚ノ葉ガ舒ル
 ト一枚ノ葉ガ焦レル故ニ之ヲ蕉ト稱スル又巴ハ乾物ノ俗言デ是レモ蕉ト同ジ意デアアル是レガ芭蕉ノ意味デアアル
 ●いちの餅 いちゐがし (Quercus gilva Br.) ノ堅果ヲ日乾シ唐臼デ搗テ果皮ヲ去リ其種子ヲ桶ニ入レテ水ニ
 酒シ毎日一度ヅ、水ヲ換ヘ一週間許シテ之ヲ日乾シ唐臼デ搗テ粉トナシ幾度モ篩デ通シ之ヲ熱湯デ捏ネ糯ノ上
 ニ乗セテ一緒ニ蒸シ共ニ搗キ交ゼ餅トナシテ食スル色ハ茶色デ好事ノ家デ之ヲ製スル (大和奈良公園一茶店主
 人ニ聞ク)、此樹ハ我邦西南暖地ニ多ク奈良公園ニモ大木ガアル同公園デハ其實ヲ鹿ガ好ンデ食スル